

旧石器時代文化から
縄文時代文化の潮流

—研究の視点—

Currents of Long-term Change from the Palaeolithic to the Jomon Cultures

—Research Perspectives—

白石浩之編

Edited by Hiroyuki SHIRAISHI

六一書房

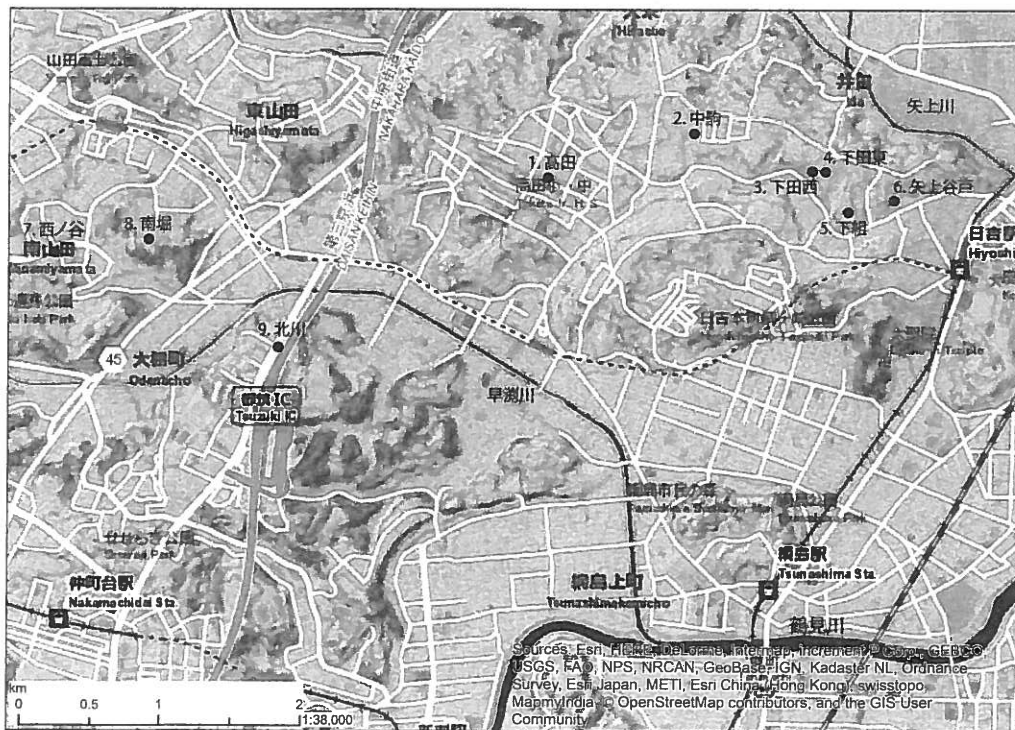
横浜市港北区高田貝塚とその周辺の縄文時代前期遺跡

—緊急発掘資料と表面採集資料からわかること—

羽生 淳子

はじめに

渋谷から横浜方面に向かって東横線に乗ると、多摩川を越えてしばらくは低地が続く。元住吉駅を過ぎて、鶴見川の支流である矢上川を渡った後、はじめて台地に行き当たる。この台地は、矢上支丘とも呼ばれ（近森 1955）、矢上川に沿って西側に延びて多摩丘陵につながる。台地上の平坦面の道路の北側が川崎市、南側が横浜市となる。そして、台地の南斜面には、矢上谷戸貝塚、下組貝塚、下田東貝塚など、学史に残る縄文時代前期の貝塚が位置する（神奈川県県民部県史編纂室 1979）（第 1 図参照）。東横線の線路を離れて、台地南側の開析谷（谷戸）の谷底を西に向かって歩くと、やがて横浜市港北区日吉から下田町を過ぎて高田町に入り、東側にゆるく突き出した舌



第 1 図 高田貝塚の位置と周辺の遺跡

状台地に行き当たる。その舌状台地上に、高田貝塚がある。

1959年生まれのは私は、引越しをはさみながらも、子供時代のすべてを矢上川南側の台地の上で暮らした。1965年の春までは、井田病院の東側の急な坂を下った、川崎市側の斜面の小さな家に住み、その後、東側に1kmほど離れた横浜市側の下田町の家に移り住んでそこで育った。下田町の家に移った当時、谷戸の一部にはまだ水田が残り、台地上には畑が広がっていた。台地の斜面に散在していた雑木林では、クヌギやコナラなどのドングリを拾った。雑木林にはサンショウも自生しており、近くの「お宮さん」の境内には、アカガシの巨木があった。しかし、1960年代後半から、開発の波とともに新しい宅地の造成が進み、地域の景観は急激な変貌を遂げた。

小学校4年生の時(1969年)に、母が、井田病院に近い台地上の民家で駐車場の改修があり、断面に貝層が露出しているのを見つけた。私の家の近所には、当時、明治大学考古学専攻の一年生だった松村恵司さん(現・奈良文化財研究所長)が住んでいらしたので報告したところ、週末に一日だけ簡単な調査をすることになった。その結果、縄文時代前期の土器が出土し、下田東貝塚であることがわかった。その時に、貝殻のバケツ運びを手伝ったのが私の考古学の原点だ。

縄文土器に魅せられた私は、しばらくして、近所の畑や宅地造成地にも縄文土器片や石器が散らばっていることに気がついた。一番多いのが縄文時代前期後半から中期の土器、次に多いのが後期の土器だった。早期の土器は稀に見つかったが、晩期のものはなかった。台地上の日当たりの良い黒土の畑では、たいていの場合、縄文土器を拾うことができた。子供だった私の頭の中には、自宅から徒歩で約30分以内の地域の遺跡を中心とした、詳細な景観マップが刻まれた。畑地にあった遺跡のほとんどが破壊されて宅地となった今でも、どの場所でどの時期の縄文土器を拾うことができたのかは、はっきりと覚えている。そうして足繁く通った表面採集地の一つが自宅近くの宅地造成によって破壊された中駒遺跡(今村・松村1971)であり、もう一つが高田貝塚だった。これらの遺跡は、私だけでなく、近所の同級生の男の子ら(いわゆる考古少年)にとっても土器拾いの格好の場所だった。

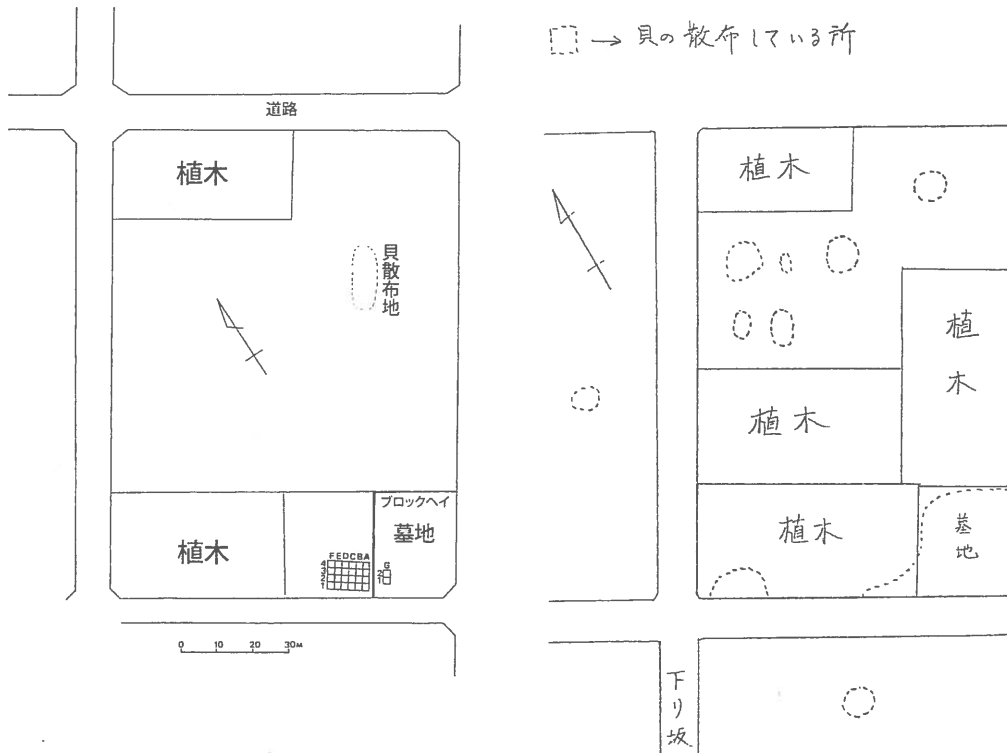
この地域は、港北ニュータウン地域に近く、高田貝塚の南西約2kmには北川貝塚、さらに西側には南堀貝塚と西の谷貝塚が存在する(坂本2003・2007、武井2008)(第1図参照)。谷戸の低地には水田、台地の上には畑と山林が広がっていた日吉や高田近辺の近年までの景観は、港北ニュータウン地域と共通する(横浜市歴史博物館・横浜市ふるさと歴史財団1996)。

本稿では、この高田貝塚から出土した縄文時代前期土器について、慶應義塾大学の江坂輝彌による1971年の緊急調査発掘資料(江坂1972ab)と、筆者の表面採集資料について、その一部を紹介する。そして、近接する港北ニュータウン地域内を含む近隣の縄文時代前期遺跡の出土資料も参考にしながら、縄文時代の生業と、縄文時代から現代にいたる景観について考える。

1 高田貝塚の位置と研究の歴史

高田貝塚は、標高約 40m の台地上（神奈川県県民部県史編纂室 1979：90 頁）の、横浜市港北区高田町 2231 番地付近（江坂 1972ab）に位置する。宅地化が進んだこの近辺で、現在でも畑地が広がる数少ない場所である。

高田貝塚研究の歴史は古く、明治 26 年には、井上喜久治・鳥居龍蔵（1893）の「貝塚七ヶ所の記」のなかで、「高田村の貝塚」として紹介されている。1925（大正 14）年には、谷川（大場）磐雄が、武蔵国都築郡新田村高田興禅寺裏の遺跡として記載し、出土遺物を紹介した。図示された遺物には、現在の土器編年でいえば縄文時代前期諸磯 a 式にあたる肋骨文や木の葉文が施文された土器と、諸磯 b 式古手の爪形文土器が多いが、諸磯 b 式中段階に相当する浮線文土器もある。これらに加えて、後期堀之内式や加曾利 B 式土器も出土している。石器については、打製石斧、「磨石斧」、石皿などのほかに、「凹石敲石も勿論存在して」と記載されている。その後、1927 年には、大山史前学研究所が高田貝塚の小規模な発掘を実施し、諸磯式と勝坂式を出土する主鹹貝塚として報告した（大山・宮坂・池上 1933）。さらに 1930 年代後半には、国学院大学の島田暁ら上代文化研究会のメンバーや、酒詰仲男、松岡六郎なども発掘を試みた（江坂 1972a）。



第 2 図 江坂の発掘グリッド（左：江坂 1972a に加筆）と両国（1982）が報告した貝散布地（右）

高田貝塚は、中居根部落の北裏台地上に位置したことから、中居根貝塚、高田中井貝塚とも呼ばれた(近森 1955)。1939年、酒詰仲男と江坂輝彌は、自らの調査資料も含めて諸磯期の土器を検討し、「下田町東貝塚期(境田第1号貝塚期)―境田第2号貝塚期―高田中居根貝塚期―矢上谷戸斜面貝塚期―四枚畑貝塚期」という前期後半の土器編年案を提案した。これは、後年、江坂(1951)による水子→矢上→四枚畑→草花という諸磯式土器の編年へとつながった(今村 1982)。

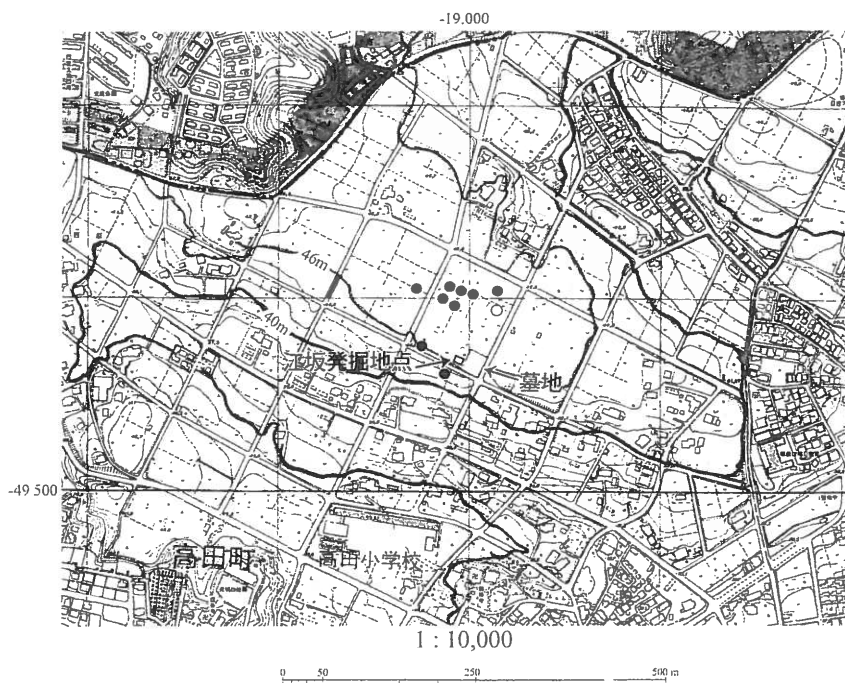
1955年、近森正は、慶應義塾高等学校考古学研究会会誌 *Archaeology* に「高田中居根西貝塚―多摩支丘に於ける縄文後期の課題―」を掲載した。この論考には、墓地内遺跡から西北約130mのところにあつた貝塚から、土地所有者が畑地の地表下2m余りにわたって耕作土の入れ替えを行った際に得られた資料が掲載されている。出土土器は、後期堀之内式(総量の約40%)が最も多く、次いで後期加曾利B式、中期勝坂式・加曾利E式(約25%)、前期諸磯式(約10%)、ごく少量の早期茅山式と続く。この貝塚は、耕作土入れ替えにより煙滅した。

1971年12月、江坂は横浜市教育委員会の依頼を受け、墓地改修工事に伴った緊急発掘として墓地内の4m×2mおよび墓地西側畑地12m×8mの緊急発掘調査を行った(江坂 1972ab, 第2図左参照)。調査の概報(江坂 1972a: 154頁)によれば、遺跡地一帯は大きく攪乱を受け、昭和初めの小発掘の痕跡が認められた一方で、掘り残された部分も確認された。遺構としては、竪穴住居址が一軒検出されたが、北西部は近世の墓穴により破壊され、南西部は土師の竪穴と重複しており、さらに住居址床面まで多数の攪乱がみられた。そのため、住居のプランと共伴遺物は確認できていない(江坂 1972a: 153頁)。

2 表面採集資料とそれに伴う記録の重要性

「はじめに」で触れたように、高田貝塚は、考古学に興味をもつ近隣の住民や学生にとって、表面採集の格好の対象となっていた。筆者も、小学生時代の1970~1972年を中心として、その後も1980年頃まで、断続的に同遺跡で表面採集を行った。資料のほとんどは、耕作の際に掘り起こされて畑の端に遺棄されていた土器片や石器を採集したものだ。植木の植え替えの際には、地中深くまで穴が掘られるため、近辺に大型の破片が散乱していたこともあった。

慶應義塾大学考古学研究会日吉支部は、1981年5月に高田貝塚の見学を行っている。メンバーの一人、両国将志は、その後、1981年5月から1982年1月にかけて10回ほど同遺跡を再訪し、その際に表面採集した土器片について、『横浜市高田貝塚表採の遺物』と題した小稿を私家版で発表した(両国 1982)。拓本が掲載されている土器は11点と少数だが、繊維を含む黒浜式土器、波状文、肋骨文などの諸磯a式、幅広竹管爪形文による木の葉文や幾何学文様を特徴とする諸磯b式の古手の土器とともに、後期堀之内式土器も報告されている。さらに、両国は、拓本が掲載されている資料以外についても型式ごとに破片数を提示している。それによれば、黒浜式15点、諸磯a式72点、諸磯b式114点、諸磯c式6点、後期資料56点、不明41点、計304点となる。表面採集資料とはいうものの、高田貝塚出土土器の時期別比率を考慮するうえで貴重なデータであ



第3図 高田貝塚付近の地形図と貝散布地の分布（○は江坂1972aの報告，●は両国1982の報告による）（横浜市都市整備局1982に加筆）

る。これらの出土状態について、両国は、「今回の表採で採集した遺物、特に土器の量はかなりの量を示すが、それは畑地をショベルカーにより、地下一メートル以上の天地返しを行った事により、地中にあった遺物を掘り起こした為にこの様に遺物の量が多くなった」と述べている。

両国（1982）の報告でもう一点重要なのは、1981年5月～1982年1月の時点で貝殻が散布していた地点の略図を掲載していることだ。第2図右側にこれを示す。墓地およびその西側の江坂の発掘地点付近に加えて、墓地の北から北西側にかけて複数の地点貝塚が点在している。このうち、南側斜面の地点については、筆者の記憶では、後期の資料が多かったように思う。

第3図は、横浜市都市整備局（1982）による地形図に加筆し、40mと46mの等高線を太線にして舌状台地の輪郭を明らかにした上で、墓地、江坂の発掘地点、江坂が報告した貝殻散布地点（○）、両国が報告した貝殻散布地点（●）の位置概略を示したものである。ただし、明治41・42年の地図をみると、高田貝塚が位置する舌状台地の北東端はさらに丸みを帯びていることから、この部分については近代の削平が推測される。

鶴見川流域における縄文時代前期後半の地点貝塚は、廃棄された住居址内に形成されるのが一般的である。第3図に示した地形と、第2図から推測される地点貝塚の分布状況から考えるならば、この遺跡では、舌状台地最高部に近い標高46m前後の地帯に、住居が馬蹄形ないし環状にめぐらされていたと考えられる。

3 1971年に発掘された縄文時代前期土器の概要 (第4~6図)

筆者は、生前の江坂先生より、1971年緊急発掘資料の整理を依頼され、カリフォルニア大学バークレー校の学生らの助力を得て、出土遺物の整理作業を進めてきた。整理作業は現在進行中だが、第4~6図に拓本作業が終了した縄文時代前期資料の一部を示す。なお、後期堀之内式と加曽利B式の資料もかなりの量が存在するが、紙数の制限により今回の報告には含めない。

黒浜式深鉢 第4図1~8は、胎土に繊維を含む黒浜式土器深鉢破片である。縄文のみの資料が多いが、1のように半載竹管により縦区画を施したあと、肋骨文を配するものもある。

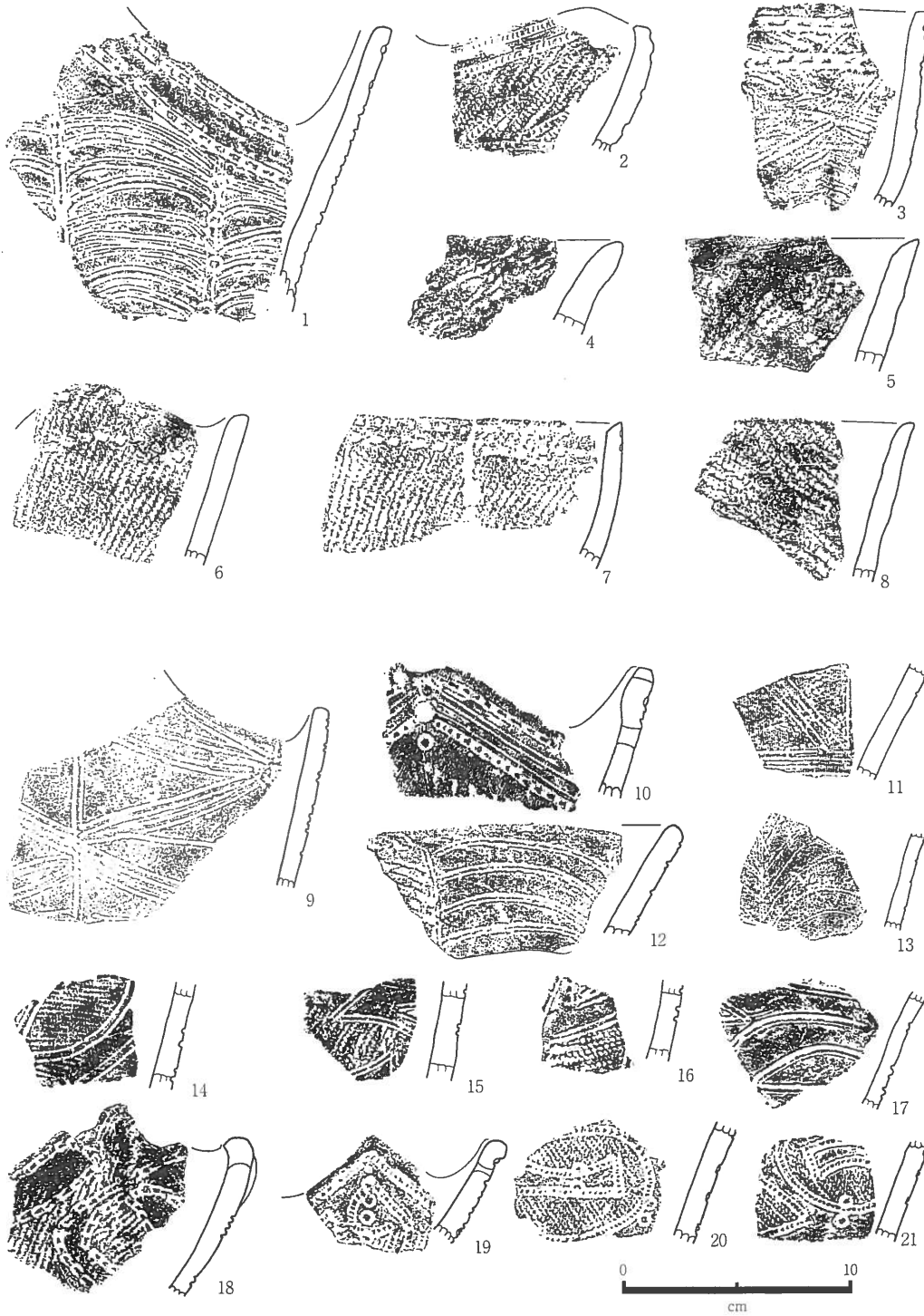
諸磯a式深鉢 第4図9~21と第5図22~25は、諸磯a式土器である。この時期の土器文様に特徴的な平行線を描くのに用いられた竹管工具の半径は、おおむね5mm以下である。9~13には、第4図1と同様の縦区画と肋骨文ないし直線状の格子文が施されている。14~21は、器面に縄文を施文した後に、半載竹管による平行線ないし爪形文で入組木葉文状の図形を描いてからその外部(ないし内部)を磨り消す、いわゆる磨消縄文技法によって装飾された土器である。諸磯a式期でも後半期(いわゆる矢上期)に特徴的に見られる装飾技法である。第5図22~25は、多載竹管により、口縁に沿って平行線といわゆる鋸歯状文ないし波状文を配した土器である。

諸磯b式古段階深鉢 第5図26~54は、諸磯b式古段階(今村1980)の深鉢片である。施文に使われた竹管工具の半径は5mm以上であり、平行線の幅は、9~21よりも広い。このうち、26~38には半載竹管を用いた平行線文、44~54には半載竹管によるいわゆる連続爪形文が施されている。いずれも、これらの文様技法によって、器体上半に幾何学文様ないし入組木葉文が器体上半に施された深鉢の破片と考えられる。39~43には、平行線による波状文が施されている。

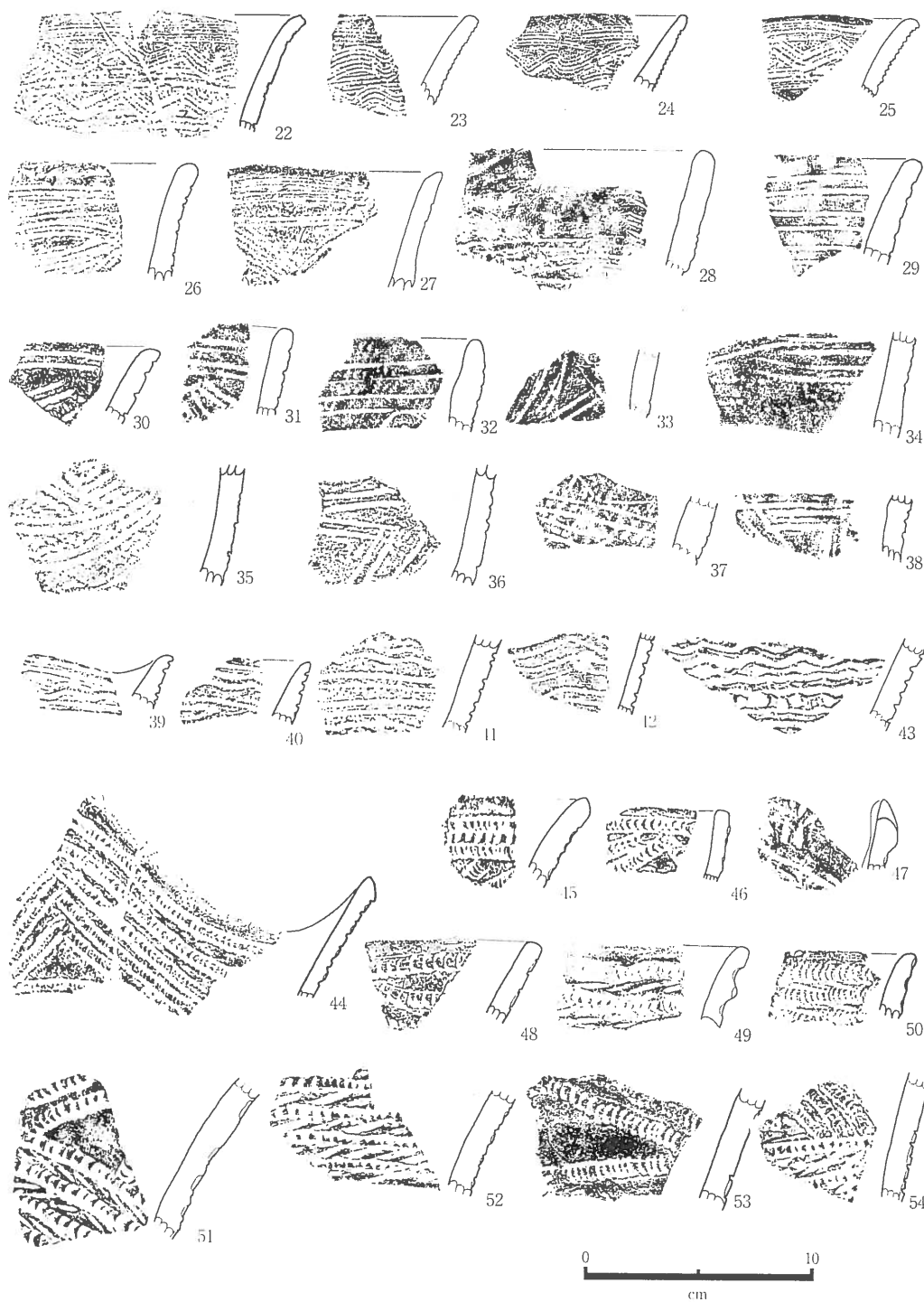
諸磯b式中段階深鉢 第6図55~70は、器面に細い粘土紐を貼付しその上に刻み目や縄文を配した、いわゆる浮線文土器である。諸磯b式中段階(今村1982)に位置づけられる。図示した資料がほぼすべてであり、出土資料全体の中に占めるこのタイプの土器の総量は少ない。

その他 第6図71・72は、縄文のみを施した深鉢口縁片、73は無文土器口縁片で、諸磯a式土器の可能性が高いが断定はできない。74・75はおそらく諸磯b式と考えられる浅鉢片、76は無文の赤色塗彩鉢口縁片、77・78は薄手の小型鉢口縁片である。いずれも祭祀用品と考えられる。79・80は、諸磯式土器と併行時期にある北白川式土器である。

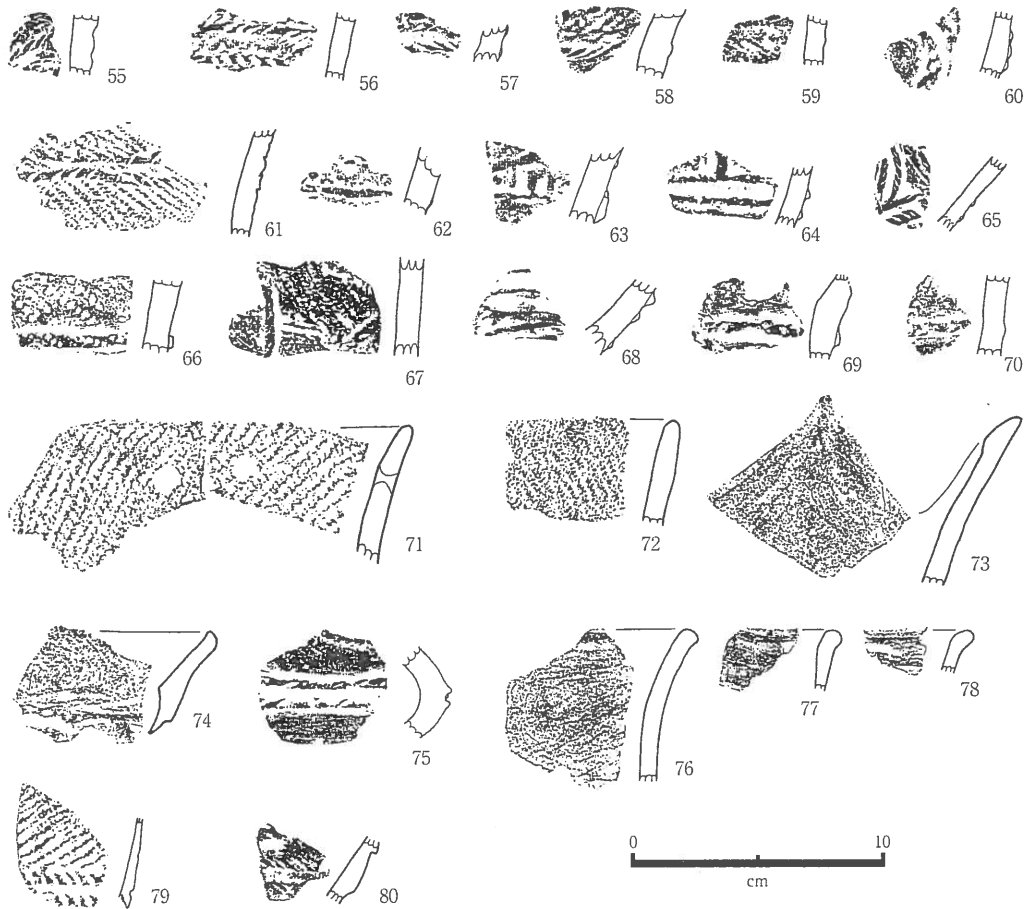
以上に示した1971年の発掘資料は、諸磯a式土器を中心としながらも、黒浜式から諸磯b式期古段階までの資料も数多く認められる。浮線文が出現し器形のキャリパー化が進む諸磯b式中段階の資料はわずかながら見られるが、それに続く諸磯b式期新段階の資料は皆無である。このような時期的な特徴は、鶴見川とその支流域・多摩川とその支流域を含む東京湾東岸~多摩地域に共通する(Habu 2001)。



第4図 高田貝塚発掘出土土器(1)



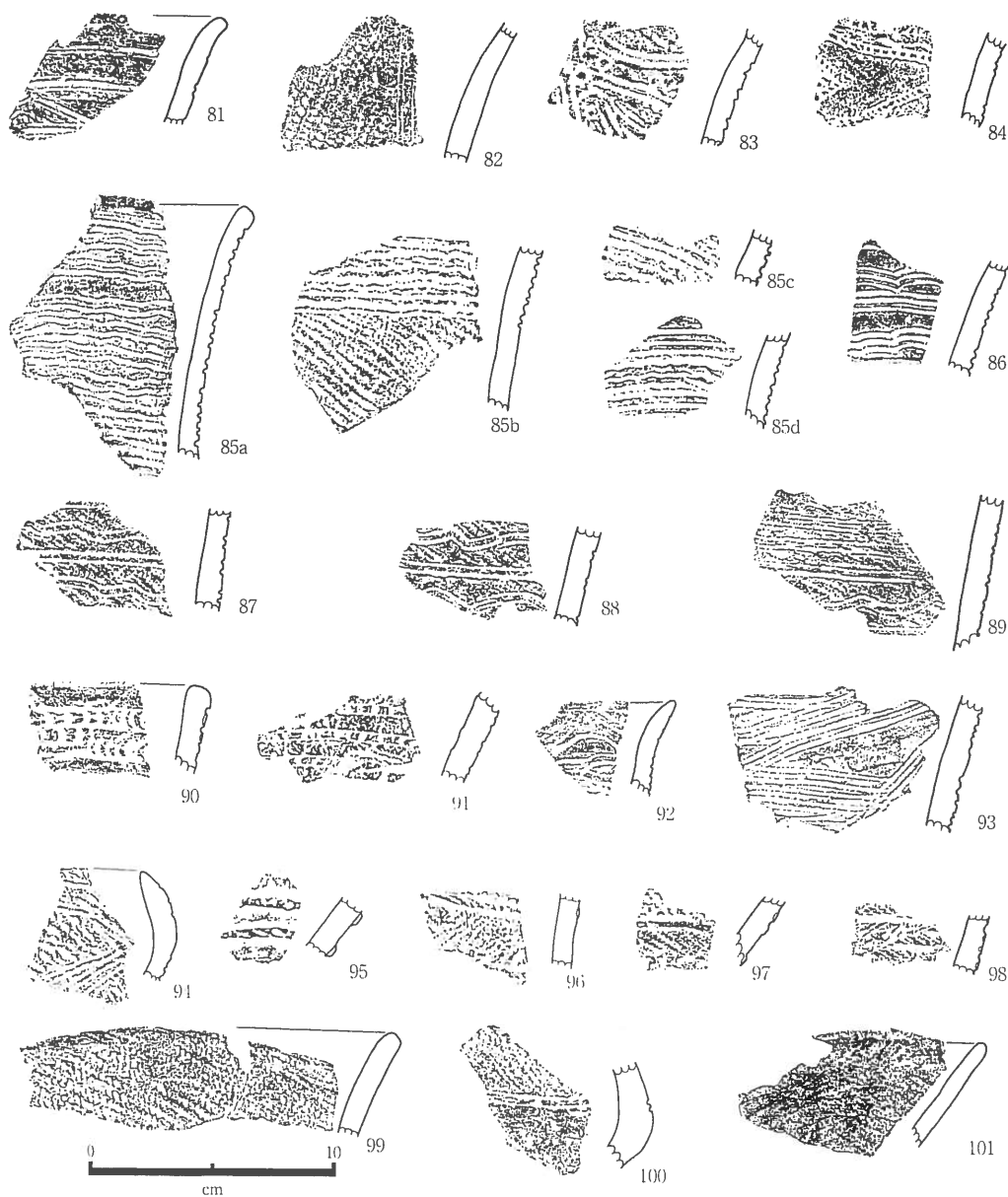
第5図 高田貝塚発掘出土土器 (2)



第6図 高田貝塚発掘出土土器 (3)

4 表面採集資料 (第7図)

前述のように、筆者は、1970～1972年を中心として、1980年頃まで断続的に高田貝塚で表面採集を行っている。そのうち、縄文時代前期資料の一部を第7図に示す。81～89は諸磯a式に分類される。このうち、85a～85dは、植木穴の掘削後に墓地の西側地点で採集された同一個体である。90～93は、諸磯b式古段階に属する連続爪形文(90・91)と幅広の平行沈線文が施された土器片(92・93)である。94～98は、諸磯b式中段階の深鉢破片である。94には、幅狭の平行沈線文がキャリパー形土器の口縁部に施されている。95～98は、浮線文土器である。99は、縄文のみが施された深鉢の口縁部で、諸磯a式の可能性が高い。100と101は、諸磯a～b式の浅鉢破片である。これらの表面採集資料の特徴と時期別の出土量のおおまかな比率は、前節で記載した発掘資料と共通する。



第7図 高田貝塚表面採集土器

5 考察と展望

「はじめに」で述べたように、高田貝塚の西南には港北ニュータウン地域が位置しており、前期の大集落遺跡として、北川貝塚、西ノ谷貝塚、南堀貝塚などがある。これらの遺跡では、港北ニュータウンの開発に伴って大規模な発掘調査が行われている（坂本2003・2007、武井2008）。西ノ谷貝塚からは、黒浜式期の住居13軒、諸磯a式期の住居35軒、諸磯b式期の住居3軒、南

堀貝塚からは、黒浜式期の住居が10数軒、諸磯a式期の住居が30軒以上、北川貝塚からは、花積下層式期の住居4軒、黒浜式期1軒、諸磯a式期13軒、諸磯b式期10軒がそれぞれ報告されている(坂本2003・2007、武井2008)。

このうち、西ノ谷貝塚では、諸磯a式期の住居内貝層3ヶ所について、詳細な分析調査がなされている。いずれも比較的短期間に堆積したと推定され、貝類以外の魚類・獣類はきわめて少ない(中村2003、忍沢2003)。南堀貝塚の住居址内貝層・斜面貝層でも、貝類以外の動物遺存体は少ない(高橋・熊谷2008)。このような傾向は、いわゆる古鶴見湾岸に位置する縄文時代前期後半の貝塚の多くに共通する(中村2007)。ただし、北川貝塚の住居内および平地貝層(花積下層~諸磯b式期)と、西ノ谷貝塚の西南1.5kmほどに位置する茅ヶ崎貝塚の斜面貝層(諸磯b式期)では、魚骨・獣骨が豊富に出土している(忍沢2003、中村2007)。この地域における前期後半の貝塚遺跡について、その生業の特徴をひとまとめにして考えることはできない。

高田貝塚については、今回は図示しなかったが、表面採集資料のなかには、魚骨・獣骨も含まれている。今後、これらの動物遺存体の年代測定を行ったうえで、近隣の貝塚遺跡と高田貝塚との共通点、相違点について、さらに検討する必要がある。

鶴見川とその流域の前期後半の貝塚遺跡のほとんどが小規模な地点貝塚・斜面貝塚であり、魚骨の出土量も全体としては少ないことから、この地域の前期後半集落における主食が海産物だった可能性は低い。中緯度地帯における狩猟採集民の集落規模拡大と定住度の相対的な高まりは、冬を越すための食料の大量確保とその貯蔵と不可分の関係にあることを考えるならば、木の実などの植物質食料の採集がこれらの大集落遺跡の食料基盤であった可能性が高い(高橋・熊谷2008参照)。

鶴見川流域の黒浜・諸磯式期の貝塚についても一つ特徴的なのは、石器組成において、磨石・礫器類が多く出土していることだ。西ノ谷貝塚、北川貝塚や、矢上川上流域の川崎市鷺沼遺跡では、いずれも磨石・礫器類の出現率が高い(羽生2000、Habu 2001)。高田貝塚の発掘資料と表面採集資料でも、今回は図示しなかったが、磨石・礫器類が目立っている。磨石類がどんぐりなどの加工具であったとするならば、これらの遺跡における生業の特徴を推測する手がかりとなる。高田貝塚から出土した磨石類については、現在、残存でんぶん粒分析を依頼中である。

上記のように、鶴見川流域は南堀貝塚をはじめとする縄文時代前期の貝塚を伴う大集落が多いことで知られているが、これらの集落遺跡における住居址の多くは黒浜式期から諸磯b式期の古段階に集中している。この時期は、祭祀用と考えられる浅鉢や小型の鉢が一般的に出現するようになり、社会構造の複雑化が進んでいた可能性がある。しかし、諸磯b式期中段階以降は、この地域における貝層を伴う遺跡は激減する。さらに、諸磯b式新段階~十三菩提式期については、鶴見川流域だけでなく、関東地方南西部全域において住居址を伴う遺跡がきわめて少ない(今村1992)。つまり、前期末は、黒浜期から諸磯b式古段階まで順調に成長をつづけてきた生業・集落・社会システムが解体し、それに続く縄文時代中期の新しいシステムの構成へと向かう時期であったと考えられる。

筆者は、鶴見川流域に貝塚を伴う大集落がなぜこの時期に集中して形成されたのか、その食料基盤は何だったのか、そしてそれがどうして解体に向かったのかを考えるに際しては、一年ごとや数十年ごとの生業サイクルと、気候変動を含む、より長期的な変化との相互作用を含めて、生業・集落システムのレジリエンス（羽生 2018）という観点から検討する有効性を提案したい。その際、海産物の利用とともに、多摩丘陵につながる台地としての植生とそれに伴う文化景観、さらに、多様な山の幸の利用にもとづいた狩猟採集活動の季節性と重層性に注目する必要がある。そのための第一歩としては、貝塚に伴う動物遺存体の分析はもちろん、土器の残存脂肪酸分析、出土人骨の炭素・窒素安定同位体分析等の科学的分析が重要だ。港北ニュータウン地域における山の幸の利用に関する民俗誌資料（たとえば横浜市歴史博物館・横浜市ふるさと歴史財団 1996）も、谷「地形における生業の季節性と重層性を考えるヒントを与えてくれるかもしれない。

謝辞。慶應義塾大学民族学考古学研究室には、高田貝塚の発掘資料をお貸しいただいている。また、本稿での図版作成にあたっては、カリフォルニア大学パークレー校の Philip Brazina, Amanda Levi, Pauline McCay をはじめとする数多くの Undergraduate Apprentices の助力を得た。ここに記して感謝する。

引用文献

- 井上喜久治・鳥居龍蔵 1893「貝塚七ヶ所の記」『東京人類学会雑誌』第 8 巻 274-278 頁
- 今村啓爾 1982「諸磯式土器」『縄文文化の研究』第 3 巻 211-223 頁
- 今村啓爾 1992「縄文時代前期末の関東における人口減少とそれに関連する諸現象」吉田格先生古稀記念論文集刊行会編『武蔵野の考古学』85-115 頁
- 今村啓爾・松村恵司 1971「横浜市日古中駒遺跡の中期縄文式土器」『考古学雑誌』第 57 巻 81-93 頁
- 江坂輝彌 1951「縄文文化について (9)・(10)」『歴史評論』第 31・32 号 91-95 頁・85-95 頁
- 江坂輝彌 1972a「横浜市港北区高田貝塚の調査」『考古学ジャーナル』No.74 17-18 頁
- 江坂輝彌 1972b「横浜市港北区高田町貝塚調査概要」横浜市埋蔵文化財調査委員会編『昭和 46 年度横浜市埋蔵文化財調査報告書』147-157 頁
- 大山柏・宮坂光次・池上啓介 1933「東京湾に注ぐ主要溪谷の貝塚における縄文式石器時代の編年的研究予報 第一編」『史前学雑誌』第 3 巻 6 号 1-84 頁
- 忍沢成規 2003「西ノ谷貝塚 J57 号住居址内貝層の調査」坂本彰編『西ノ谷貝塚』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 33 (財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 271-294 頁
- 神奈川県県民部県史編纂室編 1979『神奈川県史 資料編 20 考古資料』神奈川県
- 酒詰伸男・江坂輝彌 1939「神奈川県都筑郡境田貝塚調査報告」『考古学雑誌』第 29 巻 458-481 頁
- 坂本彰編 2003『西ノ谷貝塚』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 33 (財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
- 坂本彰編 2007『北川貝塚』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 39 (財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
- 高橋憲太郎・熊谷賢 2008「南堀貝塚出土動物遺存体について」武井則道編『南堀貝塚』港北ニュータウ

- ン地域内埋蔵文化財調査報告 40 (財) 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 147-165 頁
- 武井則道編 2008『南堀貝塚』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 40 (財) 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
- 谷川磐雄 1925「諸磯式土器の研究(三)」『考古学雑誌』第15巻 26-50頁
- 近森 正 1955「高田中居根西貝塚」『Archaeology』21号 10-15頁
- 中村若枝 2003「西ノ谷貝塚J30号住居址覆土内貝層の分析」坂本彰編『西ノ谷貝塚』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 33 (財) 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 231-270頁
- 中村若枝 2007「縄文時代の動物遺存体について」坂本彰編 2007『北川貝塚』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 39 (財) 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 291-306頁
- 羽生淳子 2000「縄文人の定住度」『古代文化』第52巻 95-103頁・214-225頁
- 羽生淳子 2018「在来知・科学知とレジリエンス—景観と文化の長期的変化を考える視点から—」羽生淳子・佐々木剛・福永真弓編『やま・かわ・うみの知をつなぐ—東北における在来知と環境教育の現在—』東海大学出版部 3-12頁
- 横浜市港北ニュータウン埋蔵文化財調査団編 1986『古代のよこはま』横浜市教育委員会
- 横浜市都市整備局 1982「港北区図その1」(1万分の1)
- 横浜市歴史博物館・横浜市ふるさと歴史財団 1996『企画展 港北ニュータウン地域の暮らし』
- 両国将志 1982「横浜市高田貝塚表採の遺物」私家版
- Habu, J., 2001. *Subsistence–Settlement Systems and Intersite Variability in the Moroiso Phase of the Early Jomon Period of Japan*. International Monographs in Prehistory, Ann Arbor.

旧石器時代文化から縄文時代文化の潮流
—研究の視点—

2019年1月10日 初版発行

編者 白石 浩之

発行者 八木 唯史

発行所 株式会社 六一書房

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-2-22

TEL 03-5213-6161 FAX 03-5213-6160

<http://www.book61.co.jp> E-mail info@book61.co.jp

振替 00160-7-35346

印刷 藤原印刷 株式会社

ISBN978-4-86445-109-3 C3021 © Hiroyuki Shiraishi 2019

Printed in Japan

